

**令和7年第5回壬生町議会定例会
閉会中の継続調査報告書
(教育民生常任委員会)**

教育民生常任委員会 閉会中の継続調査委員長報告

教育民生常任委員会に係る閉会中の継続調査結果をご報告申し上げます。

令和7年第4回壬生町議会定例会において、閉会中の継続調査といたしました「小規模特認校の現状と今後」について、令和7年10月22日は全委員、11月25日は4名出席のもと調査しました経過と結果をご報告申し上げます。

通学区域に関わらず壬生町全域から通学でき、少人数の良さを生かし、特色ある教育を展開している小規模特認校である羽生田小学校の現状と今後の見通しについて、所管委員会による調査を行いました。

まず、調査事項についての説明を受け、次にその説明に対する質疑応答が行われ、その後、羽生田小学校の各教室などの視察が行われ、最後に調査事項全体の質疑応答が行われました。

委員からの「学区外から来る児童は新入学からか、途中から入学する児童もいるのか。また、どのような理由で羽生田小学校に入学するのか。」という質問に対し、

「1年生から入学する児童もいれば、途中から入学する児童もいます。小規模特認校に来るときは必ず見学をしていただき、納得していただくことが規約にあります。大規模校の中で馴染めなかったお子さんが、羽生田小学校の教育環境の中で生き生きと育っていく例もあり、保護者の方も来てよかったと感じています。」との説明を受けました。

また、委員からの「羽生田小学校に子どもを入学させたいと思ったときの手続きと、就学を控えた保護者へのPR方法は。」という質問に対し、

「まず学校へ電話連絡等があり、途中から入学の場合は相手の学校と連携を取ります。教頭から説明をして、全クラスの授業の様子などを見てもらっています。説明では、学区外からの通学となるため、基本的に保護者による送り迎えが必要であること、PTA活動への賛同、特に地域と密着した土日などの行事への協力が必要であること、羽生田小学校には特別支援学級がないため、集団活動などに配慮を要する場合に特別支援学級の良い点もお伝えしています。その後、町教育委員会に申請書を提出し、町教育委員会の許可を得た児童が通学することになります。また、PRはオープンスクールでのチラシの配布や、幼稚園・保育園、銀行、スーパー、役場など様々な場所で行っており、就学時健康診断の際にもチラシを配って、大規模校の保護者へもPRしています。」との説明を受けました。

また、委員からの「特別支援学級がないが、入学後に特別就学支援が必要な場合はどう対応するのか。」という質問に対し、

「町の教育支援委員会に諮り、入級が『適』となったら、その子に合った適切なカリキュラムを説明します。最終判断は保護者であり、羽生田小学校を希望される方もいます。羽生田小学校では、全職員で共通の理解をし、児童全員のことを把握しており、心情面での配慮はきめ細やかに行っています。また、学校生活支援員1名の配置があり、配慮を要する児童のクールダウンや、学習の遅れがあれば一斉授業の中で支援が可能です。パキスタン国籍の児童2名がおり、教員助手1名の配置があり、国語などのフォローを行っています。」との説明を受けました。

視察後には、委員から「子供たちが活発で生き生きとしている。」、「先生との距離感が近く、仲間のような雰囲気と一緒に授業を楽しんでいる。」、「小規模校は先生の目が行き届き、児童も先生とマンツーマンで話ができ、集中力が違うと感じた。」、「デジタル技術を活用し、その場で映像が見られるなど、素晴らしい授業内容である。」、「先生の目が届き、答えができていのかどうかを確認できているのが素晴らしい。」といった意見がありました。

また、委員からの「小規模校も大規模校もそれぞれの良さがあるが、現場の先生として小規模校での悩みはあるか。」という質問に対し、

「個人的な悩みですが、学校に来ている意味の一つに『けんか』ができるというのがあると思います。羽生田小学校では先生の目が届くので、お互いの話を聞いてその日のうちに解決しています。一方、大規模校では『けんか』があっても目が届かないことで、1, 2週間後に自分で解決するといった遅いところがあると思います。また、体育などでは人数がもう少し多い方が技能的にお互いに切磋琢磨できると思います。また、集団で学ぶ意味として、いろんな友達の考え方があることや、知的な刺激、横の繋がり、児童たちの中での自治、リーダーシップの発揮、憧れの児童を目指して頑張ろうというところは、大規模校との違いを感じます。」との説明を受けました。

また、委員からの「将来、小中学校の統合があるかもしれないという中で、地元根差した学校がなくなった場合、地元の方は寂しがると思うか。」という質問に対し、

「ものすごく寂しがると思います。運動会の企画会議に、羽生田地区連合協議会の方や自治会長、育成会の方々がいらして、学校のことを思って、子供たちのことを考えてくださり、『一緒にできる種目はないか』と話し掛けてくださった経験があります。地域の中の本当に一緒に支えられている学校だと感じています。」との説明を受けました。

また、委員からの「例えば生徒数の少ない羽生田小学校と藤井小学校をWebでつないで授業をする方式も考えられるが、現場の先生方の弊害やメリットは。」という質問に対し、

「コロナ禍に、動画を作成して児童が家で見て学習したり、感染症になった児童や自宅待機の児童のために学校と自宅をオンラインで繋いだ経験はあります。できないことはないと思いますが、準備が大変でした。また、聞いている側のモチベーションや集中力の維持が、小学生の発達段階では難しいです。オンラインを通して対話をするのは可能ですが、いろいろな問題が生じてくると思います。学校に来ている意味の一つは、面と向かって人と人の付き合いをし、授業中에서도意見が食い違ったりすることだと思います。対面の良さが人間を育てるという意味で、オンラインを突き詰めてしまうと学校の意味がなくなってしまうことになりかねないという危険な面もあるかと個人的には思っています。」との説明を受けました。

また、委員から「地域に根差す学校は残すべきだと思う。子供たちを育てるのに地域の人たちが学校と一緒に活動することは将来に繋がると思う。」との意見がありました。

以上、教育民生常任委員会の閉会中の継続調査結果報告とさせていただきます。

令和7年11月28日

教育民生常任委員会
委員長 中川和典